

※このメールは、ミット・エナジー・ビジョン社の視察セミナーにご参加頂いた方々に BCC でお送りしています。

※四半期に1度程度、メールニュースをお送りします。

※お手数ですが、ご迷惑に思われる方は、「送付不要」とだけ記して、送信者に返信していただけますと送付リストから外します。よろしくお願いいたします。

皆さま、残暑お見舞い申し上げます。

日本でも、豪雨、台風、猛暑と気候変動が身近に迫っていることを感じる出来事が、今年はこの夏までに多数起こりました。もちろん、一つの異常気象、一つの特異現象を、すべて気候変動の影響であると言い切ることはできませんが、傾向としては、その影響を考えざるを得なくなっているのではないのでしょうか。

ドイツでも今年も異常気象でした。詳細については最後のコラムに記してあります。

さて、今回も、MIT メンバー3名から、皆さまにコラムと各種の告知についてメールニュースをお送りします。今回は、滝川→池田→村上という順でコラムを書いています。

それでは、最後までお楽しみください(村)。

## MIT: 滝川

### ソーラーパークで自然観察を楽しむ

今年の6月に行われたMITの募集型視察では、私たちの新刊本(下記)でも紹介した南ドイツの自然促進型のソーラーパークを見学しました。当初からこのソーラーパークのデザインと管理、モニタリングに携わってきた地元の自然保護団体の方が、パーク内の様々な自然促進対策や、ビオトープ的な特徴、そして生息している多様な昆虫や植物、野生動物について解説下さったのですが、それがとても面白く、あっという間に2時間が過ぎてしまいました！

パーク内の自然は良く見ると一様ではなく、地形や土質に応じて異なるビオトープが生まれていました。またデザイン的な配慮により、敷地が小動物にしっかり利用されている様子も確認できました。ハイライトは、近年では農業の集約化により珍しくなった野ウサギに、パーク内で2羽も遭遇したことです。野ウサギにとって同ソーラーパー

クは、半自然・粗放的な草地があり、猛禽類から(パネルの下に)隠れられるため、良好な生息空間なのだそうです。

昨年ドイツで生物多様性に関するひとつの学術調査の結果が発表され、ヨーロッパ中に大きなショックを与えました。それは、過去 30 年の間にドイツ各地の自然保護地帯で飛行する昆虫の総重量が 75%も減少した、というものです。理由には(自然保護地域の外での)開発や土地利用の変化、野原の減少、ビオトープの分断、農業の集約化と農薬散布などがあります。特に農地については、生態系にとっての砂漠と称されるほど、昆虫や鳥類が激減し、「沈黙の春」が急速に現実味を帯びて来ています。

もちろんこれは農業政策の問題ですが、そのような現実の中で、少なくとも 20 年間は農薬も化学肥料も撒かれないソーラーパークは特別な緑地です。自然促進型のソーラーパークを視察した方の 1 人は、日本にも昔はこういう原っぱが普通にあり、子供時代には日が暮れるまで虫取りをして遊んだ思い出を語ってくださいました。ソーラーパークは自由に入出りできる場所ではありませんが、あまり手をかけずに、身近な生物多様性という地域の人々の宝モノのある場所になる潜在性を持っています。

皆さんの運用されている(あるいはご近所の)ソーラーパークには、どのような動植物が生息しているでしょうか？

！お知らせ！

★ 共著『進化するエネルギービジネス—100%再生可能へ！ ポスト FIT 時代のドイツ』の Amazon での販売が開始しました！

Amazon での販売リンク：<http://amzn.to/2u9O0V4>

共著本『進化するエネルギービジネス』が、ようやく Amazon でもご購入頂けるようになりました！入荷にやや時間がかかりますが、ご注文頂けます。

本書ではポスト FIT 時代に突入した、「ビジネスとしての欧州再エネ」の新側面に迫ります。記述分野は、自然と調和する持続可能な発電設備のデベロップメントから、自家消費、直売、VPP、システムの柔軟化、デジタル化、セクターカップリングまで幅広く取り扱っています。

欧州在住ジャーナリストがエネルギー自立の進化を現場からレポートしています。分散型エネルギー社会実装によって変容するエネルギービジネスはどこへ向かうのでしょうか？

タイトル:『進化するエネルギービジネス—100%再生可能へ！ ポスト FIT 時代のドイツ』

出版社:新農林社

著者:村上敦、滝川薫、池田憲昭、西村健介、梶村遼太郎

ISBN-13:978-4880280950

**MIT:池田**

**我買う、故に我あり**

北イタリアのマジョーレ湖で家族で夏の休暇を過ごしています。日常の喧騒から離れて、疲れを癒したり、じっくり物事を考えたり、本を読んだりする時間でもあります。

昨日、浜辺で、読みかけだったドイツの有名なジャズ評論家ベーレント(故人)の本を手に取り、目に入ったタイトルの節を数ページ読みました。下記の引用は、その節の核心にあたる1文です。

あらゆる活動を経済的に貨幣に変換して価値づける私たちの傾向は、人間の尊厳を低下させ、ヒューマニティ(人間性)を低下させ、文化や文明を麻痺させ、「価値観」を「商品」に格下げし、「存在」を「我買う、故に我あり」に還元してしまっている…。

お金に(お金だけに)舵取りをされている傾向。日常生活、仕事、学校、コミュニティとあらゆるところで、言えることだと思います。

再生可能エネルギーの分野でも言えることです。

地域分散型の地域に価値を生み出す、地域の文化や生活や景観や自然と調和し統合した再エネ事業は、持続的に、人と地域を豊かに幸せにしていけるでしょう。そうでない「経済」という狭い視点だけの事業は、持続可能ではありません。

**！お知らせ！**

**★ソーラーコンプレックス社による日本語ニュースレター**

MIT・エナジー・ビジョンでは、南ドイツの市民エネルギー企業ソーラーコンプレックス社が発行するニュースレターの日本語版の作成をサポートしています。最新号では、大型太陽熱温水器を伴う熱供給施設の新プロジェクトなども紹介されています。下記リンクから日本語版ニュースレターを読むことができます。

<http://48787.seu1.cleverreach.com/m/7129804/>

**MIT**:村上

### 欧州を襲う猛暑とドイツの気候保護の進展

冒頭で日本の異常気象について触れましたが、ドイツでも、今年の夏は熾烈な猛暑で、私の住むフライブルク市も連日の 35°C オーバーの猛暑日が続きました。2003 年、2006 年に続いて、100 年に一度といわれる歴史的な異常気象が繰り返されています。

ドイツでは湿度が低いということもあって、これまで一般家庭でのエアコン(冷房)の普及はほとんどありませんでしたが、さすがにエアコンなしでは過ごせない夏がドイツにも頻繁に訪れるようになっていきます。エアコン設置業者は品薄と人手不足で悲鳴を上げています。現状では一般家庭における冷房の設置割合は 0.5%未満ということですが、今後、2030 年までに 15%程度に膨れ上がるという予測も出ています。

また、欧州全土では猛暑ばかりではなく、異常ともいえる渇水で、水源・河川の水不足から、自然の生態系(とりわけ森林火災や、森林へのストレスによる歴史上稀に見るキクイムシの異常発生の被害、水生生物の大量死)への悪影響、そして農業における被害も深刻です。

先週、ドイツ政府は、不作によって農業を維持できなくなる農家への緊急的な助成金支給を 500 億円の予算規模で決めましたが、単にこれまでの農業を継続している農家にお金をばらまいても、また数年後には同じようなことが発生することは目に見えています。農地のより粗放的な利用形態への転換や、温暖化対応した農業への転換が必要であるというメディア、専門家からの批判、指摘の声も小さくはありません。

もちろん、こうした事柄はドイツだけに限らず、北欧でも、南欧でも、いたるところで発生しています。

それでは、こうした身体で感じられる現象が頻発するなら、ドイツは、そして EU は、より気候保護に積極的になっているのでしょうか？ 全体の傾向としては、Yes と回答で

きます。EU 委員会では、これまで議論されてきた気候変動対策の目標値を、2030 年までに CO2 で 40%削減(90 年比)ではなく、45%削減へと上方修正しようとしています。この背景には、安価で、技術的、システムの制御も可能になってきた変動制再エネ(太陽光・風力発電)の大躍進、そしてバッテリーの普及と低価格化、高性能化によって EV(電気自動車)のより一層の普及見通し等があります。

ただし、ドイツ自体はどうか？と問われれば…Yes と No が入り混じっている回答となります。第 4 期に突入したメルケル政権は、連立政権の契約書の上では、気候保護対策に積極的である姿勢が伺えますし、確かに再エネの導入量も継続して増え続けています。

しかし、政権が樹立して以来、エネルギー政策や気候保護対策については、ほとんど目新しい動きも打ち出せず、ドイツだけではなく、欧州全土ではびこりはじめた難民・移民の大量流入からの一連の外国人排除の問題について、振り回されているように見受けられます。

先日のドイツでは、信じられないことに、とりわけ外国人排除の傾向が激しいザクセン州、ケムニッツ市で、外国人による殺人事件(被害者はドイツ人)を契機にした外国人排除のデモが暴徒化し、まちで見かけられた外国人が追い掛け回されるという事件も発生しました。同時に、アフリカから地中海を渡ってくる難民の数は減ることがなく、受け入れを敬遠したい EU 加盟国の非協力的な態度により、今もイタリアの港ではボートに乗せられたままの難民が行く先も確定されないまま、拿捕されている状況です。

ここまでのレベルで難民・移民、外国人排除の問題が山積みになると、気候保護などと悠長なことを言ってもらえないことも事実です。しかし、多くのアフリカの難民は、気候変動により居住地には住めなくなり、大量に難民化されているのも事実です。この先の欧州は、そして世界はどうなるのでしょうか？

ジャーナリスト、フランツ・アルト博士は「現在の人類は、自然に対する第三次世界大戦を繰り広げている状況であり、この戦いに人類が勝つ見込みは一切ない」と語りましたが、自然との間で和平を結ぶ覚悟が私たちにはあるのでしょうか。それが、今の私たちの世代に突き付けられた命題なのだと今年の夏を過ごして思わずにはいられませんでした。

今回のメールニュース、いかがでしたか？ それでは、次回もお楽しみに！

メールアドレス変更、配信停止は[こちらから](#)